

里地通信 6月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@niftyserve.or.jp

連載：幹事紹介 地域は元気になれる!!

長谷山 俊郎 (はせやまとしろう)

農業研究センター地域計画研究室長
全国農村交流ネット「21」事務局担当

人は元気な時もあるし、しょんぼりとする時もある。多様な人たちで構成している地域も、活気に満ちる時もあるし、生気のない時もある。では、地域の人たちは、どんな場合に元気になり、逆にどんな場合にしょんぼりとなるのか。それが分かると、元気のない地域を元気にさせることが出来る。

私は10数年前に転勤で北海道に行き、過疎で元気がなくなっている町が、2～3年前の内に活気が出てきたのを体験した。元気づけのために、特別な方法を講じたわけではない。言えることは、この町・この集落は、これで良いかを問いかけ、他をみながら、相互に考える場を繰り返し持ったにすぎない。その町には雪が多く、日本の最低気温を記録しただけあって、自然条件に厳しいものがある。だから、町の指導的な人たちは、自然条件が厳しいから、町が衰退するとみていた。だが、彼らは、この町より雪が多いところで、活気ある地域を見て、衰退が自然条件のためでないことを知り始める。そして一方では、2～3の集落で、自分たちが考えて選んだ新しい作物の導入が始まる。他方では、町農業再起のために、農協リーダーによる米の品質改善の取り組みが始まる。この動きは、町立高校の関係者や公民館にも波及し、町の改善・振興目

標をたてた取り組みをするようになる。これらによって過疎の進行は食い止められ、元気に活動する人たちがかなり見られるようになった。

個人でも、地域でも、目標を失った時に元気さはなくなる。特に地域においては、地域の人たちの「共通目標」の有無が、地域の活力に大きく影響する。しかも、目標などに基づいて行動する中で、自分や自分たちが役に立つことがまわりに何らかの影響を与えているという実感(これを「効力感」と言う)を持った時、地域の人たちに元気なのは、自分が作ったものが、喜んで買ってくれる」と言う実感があるからである。元気な里地は、共通的な目標を持っているところが多く、その下で「効力感」のある活動をしている。したがって元気のない里地を元気にさせる時には、住民の共通的な目標づくりと、「効力感」の持てる地域の活動の推進を欠かせない。

経歴：東北農業試験場、北海道農業試験場を経て、
現在農業研究センター

所属学会：日本農業経済学会・日本農業経営学会

主な著書：

- 「地域活力向上のデザイン」(農林統計協会)
- 「北の国型村落の形成」(農林統計協会)
- 「中山間地域の活路」(川辺書林)
- 「地域農業展開の論理」(明文書房)など

里地セミナー 地元学と里地おこし

講師：水俣市役所環境課 吉本哲朗

日時：5月9日(土) 10:00~17:00

今まで水俣でやってきたことを話をします。その中から地元学とは何かを考えていきましょう。

水俣のこと、村のこと、 家のことを知らなかった！

水俣の地理的中心にある農村集落に生まれ、昭和46年に大学を出てから親戚中の強い勧めで市役所に勤務。農村の暮らしは海を見る機会は少なく、水俣病に関することもよく知らずに育ちました。

水俣は源流域から不知火の海までをひとつの市域に持つ流域の町であり、日本の地形の典型的な所です。海山川があり、農山漁村に町があり、従って海の民、野の民、山の民そして町の民がいます。

ここを舞台にして起きた明治以降の歴史は、工業を媒介に発展を遂げていくという意味で日本の典型的な所です。要するに日本のすべてをギュッと縮めたようなところ。ここに水俣病という世界に類例のない産業公害が発生したのです。日本の高度経済成長を支えてきた原因企業であるチッソという会社の存在、この工場はみんなが便利で快適な暮らしをするために欠かせないモノをつくっていました。チッソ(株)の存在がなかったら日本の繁栄はなかったと思います。豊かさのそばに産業公害があり、水俣病患者の犠牲があって、地域社会も二つに引き裂かれ、どうしたらいいかという判断もせず野放しの感情のままいたずらに時を過ごしてきたのです。

私の母も水俣病患者の悪口を言っていました。いくら話をしても悪口が収まらない。それでつい最近のことですが、患者である杉本さん夫妻を黙って呼んで話を聞かせた後、患者だということを言いました。

それからです、悪口を言わなくなったのは、このことから、相手(との違い)を認めて距離を近づけて話を聞くこと、距離を近づけることが非常に大事なことだと分かりました。今では杉本さんとは家族ぐるみの

付き合いです。母も火のまつりで杉本栄子さんの語りを聞いて涙を流していました。

患者は言うに及ばず、地域丸ごとが痛みをもって、公害から環境のこと、地域のことを考え行動してきたんです。水俣は。

問題づくりから

地域にはいろんな問題があります。

問題になるのはそれをどんな問題として解くのかという問題づくりです。

問題づくりが違えば解決の仕方も違ってきます。例えば過疎の問題でも単に過疎と把握すると企業誘致による人口増加の解決策を選択しがちですが、残ったものでどうするのかという問題にしたら産品開発、農業体験、農家民宿などの解決策になってきます。

水俣病問題について患者や住民に話を聞いて考えたことは次の六つになりました。

「生きているうちに救済を」

「チッソ(株)は患者に償いを」

この二つは政府解決策で40年目にしてようやく決着となりました。

「失われた命と体は元に戻らない」

犠牲者に祈りを捧げ、人の心を癒していくなどです。

「私たちも働きたい、役に立ちたい」

社会参加と生き甲斐づくりの領域の問題です。

「水俣出身とは言えない」

市民による水俣病への理解、対外的な理解、逃げずに正面から取り組み信頼を回復していくことなどです。

「水俣湾が水俣病の原点だ」

水俣湾の底質、水質、汚染魚の一扫のことですが、ヘド口処理は終わり、水質は回復しており、魚は厚生省の定めた暫定基準値以内になりました。

水俣病の問題は解決できることと解決できないことがあります。解決できないことはこれからも共存していくことになります。

このことから、水俣地域の課題としては、
水俣病問題の解決

福祉や癒し、祈りなどの水俣病（問題）との共存
水俣病の犠牲を無駄にしない地域づくりの推進
ということになります。

これらの問題認識のもとに、火のまつり、水俣病市民講座、福祉関係などの様々な住民協働の取り組みがなされ最終的な解決になっていきました。

「地域の風土に根ざした 住まいづくり」の取り組み

10年ほど前に、林家、製材所のオーナー、建具職人、鉄工所、設計士それに市職員などが加わった住まいづくり研究会が組織されて、水俣地域の風土に根ざした住まいづくりのための計画づくりとその推進事業が展開されました。やったことは、設計コンクール、「こんな家、こんな町に住みたいなあ」という絵地図コンクールと絵本づくり、「水俣の風土と住まい」のスライドづくりとビデオ化、視察や研修会の開催などです。

この結果起きたことは、設計の力量があがり、水俣の公共施設が水俣の人たちでもつくれるようになったことのほか、行政と住民間の信頼関係が生まれたことがあげられます。後に住民の自治的組織「寄り会みなまた」が設置された時には、この取り組みに参加した人たちが地区の代表になって活発な活動を展開する素地になり、結果として水俣病問題の解決などにも大きな力を果たしてくれました。

水俣市農協青壮年部と 協働での「農産物の流通調査」

農業からの地域活性化をキーワードに水俣における生鮮農産物の流通を調べました。1986年のことです。分かった流通経路は五つです。

市場ルートでは165品を取り扱い13億円の売り上げ、旬がない、季節がないのが特徴です。全国あるいは世界の旬が飛び回っている。

大型小売店ルートでは市場を通さない取引が25～50品あり、その取扱高は3億円程度でした。

産地直送ルートは調べませんでした。

農協ルートでは14品を扱い取り扱いは10億円程度、そのうち9品は要するに水俣の特産であるみかん

とお茶、タマネギであり、取扱高の9割を占めていたこと。

農家で自家栽培ルートを調べたら65品作っていました。特徴は自分が食べているものだから、安心安全。でもタダで隣や親戚に配っていました。

それでタダで配らずに市を開いて売るようにしました。できるだけ加工して。最終的には、料理だということで「おふくろの店」を開くことになり、水俣湾埋立地で「たけんこ」という食堂が田舎の家庭料理を提供しています。

祈り・「火のまつり」

水俣病で犠牲になったすべてに対しての祈りを火に託して届けるとの考え方で「火のまつり」を平成4年から実施しています。水俣湾の水銀ヘッド口を埋め立てて封じ込めてできた土地の下にはドラム缶3000本の中に閉じ込められた魚たちがいます。何もしないままでは足を運ぶことができないとの話を患者から聞いたので「火」に着目して祈りのまつりを行ないました。

蠟燭を浮かべたもうそう竹2千本、たいまつ3千本が各地区のボランティアによって供えられ、竹人形が踊り、手づくりの竹楽器と太鼓が音を奏で、水俣病患者の杉本栄子さんが語りを行う感動的な行事に育ちました。

中山間地での取り組み

水俣の源流域に久木野という集落があります。30年代に3,500人いたのに現在1,300人という激しい過疎に見舞われた所です。

ライフスタイルインタビュー方式で10グループ調べてみました。この調査では、やっていること、生活行動に人の意識や価値観が現れます。生活行動や意識を調べて地域づくりに反映してみようと思いやってみました。

10グループの特徴は、次の通りです。

「マチ憧れ派」中高生女子。タレントの噂話をし、勉強するのはマチへ出るため。

「とにかく出たい派」20代前半の女子。標準語を話し、相手探し、田舎の良さを知らないで生活している。

「マチ感覚派」30代の子育て期の女性。標準語、畳にジュウタン、ソファ。出てくるのは珈琲で、漬物は漬けられない。

「新大黒柱派」農家にお嫁入りした30代～40代の女性。山も畑も田んぼ仕事もこなし家も切り回す。運転免許を持ち車も持っている。

「後が心配派」60～70代の農家にお嫁入りした女性。苦勞して育ててきた山や畑、田んぼ。でもその技が息子夫婦には伝わらず嫁さんは町できれいな漬物を買ってくる。後が心配だという。運転免許はなし。

「どうかしたいけど派」20代～30代の後継者たち（男性）。久木野地区の問題にはくわしいけどどうしたらいいかわからないという。

「経営工夫派」40代～50代の農家後継者。農林学校を出て、農業や林業経営を工夫してうまくやれた最後の世代。

「お勤め派」町に勤めている人たち。車を持ち、パチンコにも行き、家と墓を守っている長男。

「兼業派」農業林業と兼業して町に勤め、家と畑、田んぼと墓を守っている長男。

「年金派」お勤め派、兼業派が退職し、年金で暮らしている。あきらめの気持ち。親から言われて家屋敷、田畑、墓を守っている。

「1 + 1 = 0派」。「この村では1 + 1（結婚のこと）2ではなく町に出ていくから0になる」嫁さんの特徴は標準語を話し、出てくるのはコーヒーで遊ぶのは公園。新婚の時は町で、子どもができると子育ては町で、大きくなると幼稚園、学校は町で、そして就職も町で、もうこうなると動かないし戻らない。

こうして、久木野には、次男、三男が、産業の担い手として都会に出ていき、最近では、長男も出ていきます。

問題は住んでいる人たちの頭が過疎化していることです。住んでいる久木野の良さが分からないことに尽きます。新しい血や風をいれなければダメなのに、どうかしようと言う考えが浮かばない。過去にやってきた延長で問題解決しようと考えているので良くなりません。それで、久木野にコミュニティーセンターを整備した時に館長を全国公募したんです。「家はタダ、田んぼは貸す。役所並みの給料は出すが市の職員にはしない。けれど家族で住め」を条件にしました。

今、山に樹を植えたり、特産品開発したりして活動しています。私は「わざわざ」来るような拠点にしないとダメだと言っています。それも地区のあるもの、地区の生活文化資源を基本に知恵と工夫を加えて活用

したもの、例えばトーフです。昔ながらの国産の素材とおいしい水で作り、その料理を出す。「わざわざ型」のお客にインパクトのあるものの提供がある。わざわざ + 面白い + 地域に根ざしていることが大事だろうと思います。

すると館長という外から来た者の役割は「びっくりする」「おもしろがる」「なぜですか？と質問する」ことだと思っています。このことによって、地元の人ほとんど自分たちのこと、地域のこと、その良さに深く気づいていきます。

「水のゆくえ」「あるもの探し」と自治的組織づくり

平成3年、「寄り会みなまた」という地区活動のお世話をする自治的組織を全26地区に結成しました。その理由は、20～40代が愚痴を言っていたので行動する自治的組織を作りたかったからです。最初に仕掛けたのは「地域資源マップ」づくり、あるもの探しです。これは「ないものねだり」をするのではなく、地区のあるもの（生活文化）に光をあてて磨いていこうという意味です。

やってみると「ここには何にもない」と地区の人は言うので「ああそうですか、で、川には何がいますか？

山には何がありますか？」と聞いたんです。すると「川にはウナギ、カニ、アユ、ダクマ（エビ）ゴ、山には、やまもも、やまいも、いのしし、ドゼン、わらび、ぜんまい…」すると「そんなのでいいの？」「そんなのでいいんですよ」「そんなのでいいんだったら一杯ある！」それを絵地図にして、地元の人たちに集まってもらい、「まだある！」と文句を言ってもらって仕上げた。

仕上げたら地元の人が地元を子供をつれて見て回るツアーができた。子どもが知らないから子どもを案内しようというって、実は自分もあんまり知らなかった親が地元巡りをしています。その中から産品開発や地域づくりの動きも出てきました。水俣の八ぜの実実は全国の30%を占めていて和ローソク等の原料等になっているんですが、櫃の木館ができています。産品開発はなかなか難しい。千年銀杏の実で苗を育て販売もしましたが、「モノが語る、物語」を売ることが大切かなとこの頃は思っています。

次に水の行方を調べました。

「あなたの飲んだり使ったりしている水はどこからきてどこへ行っていますか？」

環境と言ってもよくわからない。農業や林業、漁業に従事している人たちはあんまり環境という言葉は使わない。うちのおふくろなんか「見たことも食ったこともないものは分からない」という顔をしている。うまく説明できない。だから、水俣にとって大事な環境をどうわかりやすく伝えるか考えた結果、毎日世話になっている水を通して考えることにしました。水のある暮らしは川とつながり海や森とつながっていくからです。

方法は、地図に山の頂、分水嶺、沢、谷、川を色塗りし、田、畑、自然林、竹林、農業用井堰と水路、洗い場、水源と水道管路、池、排水、そして山の神、田の神、水神さん、荒神さんなどの自然神を記入しました。

やってみてわかったことは、山（森）は、水めぐりをよくする毛細血管に似ていることです。

町の人たちの飲む水は川の上流域全部に関わっているから、山の手入れもしなければと思うけど、上水道の蛇口の向こうには森が見えなくなっていること。農村の景観は美観ではない。水が作った景観だということ。水の使い方で見えていくと地域は面白くなってきます。私の住んでいる薄原（すすばる）集落も45世帯であんまり変わらないのは、水の容量だと思います。

地元で学ぶ「地元学」のこと

「地元のことを外の目を借りながらも自ら調べ、調べただけでなく考え、そして日々生活文化を創造していく」

地元のことは調べた人しか詳しくならないし、内と外の関係が問題だということに気づいたんです。

そして、

地域固有の風土と生活文化の厚みがモノをつくり地域を作り生活を作っている。だから自然と暮らしの把握は欠かせない。自然は水のゆくえから、生活文化の厚みはあるもの探しから調べていったらどうか。

違い、異質の出会いはそれを誘発する。だから違うことを認めて共に創り上げていく、共創関係にしておくこと。

「形のあるものには意味がある。だから意味を把握してから形を変えていかないと意味を見失い形も壊れてしまう」

地元学の発端は、地域デザイン研究会の会合で考えたのがきっかけです。でも宮城県仙台市在住の結城登美雄さんは私より先に地元学という言葉で地域を調べていました。

水俣では、今井俊博さん、今井史さんなどの外の人との交流を通して、地元学が形作られていきました。

考えるだけではなく作っていく。役人は現場でやっているけどあんまり調べもせずにも考えもしていない。大学は何かを創っているのかよくわからない時がある。だから組んでやればいい。

地域をつくり、生活をつくっているのは誰かという主体の認識も問題です。地域を作っているのは役所と誤解している人がいます。主体は住民も産業界もあるし、専門家もそうです。

それから、考える手法ですが、私は「つなぐ・重ねる・はぐ」でやっています。

「つなぐ」とは水を川で森と海をつなぐとかだし、「重ねる」とは等高線と水場、お寺や神社などと重ねると、出っ張りに神社、引っ込んでいて水のある所にお寺や古い家が多い。「はいでいく」とは新しいものをイメージではいでいくこと。すると今まで見えなかったことが見えてくるようになります。だから、自分の言葉で地域の個性などを語れるようになります。「つなぐ・重ねる・はぐ」で過去を読み、これからの文脈を読み、変化を読み、今に手を打っていく。その生活づくりの方向はいい地域をつくるためです。宮城仙台的結城さんが教えてくれたいい地域の条件は次の6つです。

いい仕事がある。役に立つ仕事がある。

いい自然がある。

いい習慣がある。

少しの金で笑って暮らせる学びの場がある。

住んでいて気持ちいい。

自分のことを分かってくれる友達が3人以上いる。

これがいい地域ではないでしょうか。

里地セミナー

エコミュージアムと里地おこし

講師：大原一興（横浜国立大学工学部助教授
日本エコミュージアム研究会事務局長）
日時：5月8日（金） 13:30～17:00

エコミュージアムの概念

エコミュージアムとは、フランスの博物館学者アンリ・リベールが1970年代に提唱した、新しいタイプの博物館概念で、語源的には、ECO MUSEUM OIKOS = ECOLOGY, ECONOMY の ECO、つまり「家」という意味です。

つまり、生活全体を表現する LIVING HISTORY MUSEUM であり、「保存するもの」を切り取ってみせるのではなく、環境全体を捉え、動体展示し見せていくことです。そこから、地域コミュニティ自体を、住民参加型の方式によって博物館として捉えなおして、自ら手を入れ、博物館としていくことを目指すところを言うようになりました。

エコミュージアムという考えは、1968年のパリの学生運動と関連性を持ちながら、時代背景としての社会動乱に対して、地方の見直しを行おうという考えからできたものです。都市集中に対する地方分権の考え、地域を生き活きさせていこうという考えが根本にあり、博物館学者の立場から、博物館学自身の存在意義を考え、提唱された考え方もあります。

よって、エコミュージアムは、運動的なもの、定義しづらいものとなっています。いくつかの定義が試みられてますが、定義する学者が多く、定義がそれぞれ異なること、また、提唱者自身が、最近、COMMUNITY MUSEUM という言葉とおきかえる方が良いと提唱するなど複雑を極めていきます。

エコミュージアムの形態

日本では、エコミュージアムを、地域おこしの側面から考える傾向が強くなります。そして、地域に点在するさまざまな資源を収集品のかわりに資源情報と

して集めていくことが特徴です。生活自体の中から地域を知っている人、つまり年長者が、専門家となり、地域住民が地域を学ぶ場所であり、ビジターがきたら、ビジターに見せることができる場所が求められています。

フランスの例では、コア博物館とサテライト施設という関連性で、エコミュージアムを考えると理解しやすくなります。地域の資源であるサテライトをネットワークしていく。例えば、住民参加型で、サテライトの連絡用電話帳をつくることもネットワークの方法です。ネットワークの意味は、いくつかのアンテナが同等の価値を持つようにすることにあります。エコミュージアムの活動は、ものを所有せず、情報でつなぎとめるネットワークの役割となるでしょう。

エコミュージアムの実践

エコミュージアムの実践方式としては、いくつかの考え方があります。

理解 解説 理解 領域の付加 解釈の付加 あらたな解釈と理解を深める

という風に、理解し展開するために永遠にまわっていくことと、

知識のエコミュージアム 自ら知る 創造 知らしむ 批判する 戦う 発展する

というような流れが必要です。

そして、エコミュージアムの根本理念は、コミュニティを大事にすることです。

お知らせ：

日本エコミュージアム研究会第4回大会（兵庫県豊岡市会）が、6月19日～20日に開催されます。ぜひともご参加ください。

問合先：大原研究室

（TEL:045-339-4069 FAX:045-331-1730）

エコミュージアムと里地おこし～続き

講師：菅井正人（生活地理研究所代表）

朝日町エコミュージアム研究会副代表、元朝日町農協職員。りんご温泉に隣接する農業研究所の初代所長。りんごに注目し生活型農業、農家としての、もう一つの生き残りの方法を模索している。

設立の経緯

山形県朝日町、人口9,600人の町、ナチュラルリストの家朝日鉱泉の西澤さんが、会合を重ねてエコミュージアム研究会を実施してきました。研究用の手引書を作り、平成3年度には、町の総合計画にエコミュージアムを取り上げ、住民と行政とが一体となったまちづくりを目指しています。

研究会は、NGOとして行なわれ、行政内部では朝日町エコミュージアム研究機構を発足させました。機構側で用意した予算や人材により、国際シンポジウムを2回開催しましたが、エコミュージアムの概念自体が横文字でありかつ、難解であるため大変でした。

エコミュージアムという言葉は、地元では、誰も最初は、理解できませんでした。遠くから説明に来てくれて、みんなで勉強しましたが、使われる言葉が、みんな新しい言葉ばかりだったので、7年間、かなりの時間をかけてみんなで勉強しています。

自分たちを知ることから

最初は、暮らしや生活の臭いのしない「エコミュージアム学」という印象がありました。だから、生活している人に参加を呼びかけても入ってこない。研究会と地元が解離しました。地元の人が入ってこないの、

サテライトを選び、そこを軸として、そこから、地元に入っていくようにしました。

その結果、自分の身の回りをよく知ろうという風に変わっていきました。エコミュージアムでは、どうも目鼻がハッキリしていないので、自分たちの歴史風土を学びました。「旧石器探偵団」と称し、明治大学教授に頼み、みずから調べました。また、地元詳しい大谷さんを囲んで、劇を通してエコミュージアムを、みんなに面白おかしく伝えていきました。重田さんの友情出演と芸達者な地域の人々が劇を創り盛んに行われていきました。

そして、地域資源のガイドブックを作成、研究会の活動拠点を設けました。商工会が触発され、地域資源を使った商品開発が始まりました。

エコツアーの開催、見所、食べどころ、休みどころを設置したりしました。

今、考えるに、118人ほどのむらの名人たちのわざ、知っている生業と知恵こそが一番の地域内資源だと思います。

エコミュージアムという言葉は、捨てないで大事な言葉として位置づけていきます。生きた資源を生かし、不必要なものを切り捨てていく、暮らしと自然環境がものさしとなっている取組みです。

これからは・・・

りんごの会の形成、焼畑による根菜と雑穀、山との関わり、獺、川の上流の家庭の生活の考え、焼畑に関する事などを深めていく予定です。5月30日には、里山パーティー、箸と茶碗を持って山の中で行うパーティーを行くことにしています。

事務局日記 98年5月

5月1日

池田研究室 池田武邦先生訪問

長崎のハウステンボス環境文化研究所の所長であり霞ヶ関ビルの設計者である池田先生を訪ね、新宿副都心の池田研究室へ。

池田先生は、現在、秋田県川辺町で、鎮守の森を根幹とした地域文化の研究「池田塾」を開設されておられます。この「池田塾」では、これまでの先生の取り組みとは、まったく異なる、地域づくりに関する考え方を示されています。

先生の言葉では、

「行政単位でなく、文化による地域区分でまちづくりを考える」

「僕らの子孫にしてやることを考える」

「どうすべきかの手を打つ」

「1000年という単位で地域を考えていかなければいけない」

となる考え方です。力強い想いを一言一言に秘めている方です。

5月13日

日本大学 白岩教授訪問

専門は農業土木。全国の土地改良事業の資料、アジアを含む海外の農業地帯の報告、日本とカリフォルニアの農地整備の方法比較、広い視点で捉えておられ、面白い話をたくさん聞かせていただきました。

武蔵工業大学・環境情報学部の小堀洋美助教授とも白岩研究室でお目にかかりました。授業外で学生と一緒に構内の里山保全活動を行っておられ、今後、地域のひととともに活動が続けられるようゆるやかなネットワークを作っていきたいとのこと。専門は保全生物学で、日本では確立されていない分野です。現在は保全生物学に関する本の翻訳を行っておられます。

同じ研究棟には、6月に講師をお願いしているパーマカルチャーの糸長助教授、ピオトープの勝野教授がいらっしゃいます。日本大学藤沢校舎では、様々な環境保全のための研究が行われています。

5月18日

静岡県函南町

農家 鈴木勉（68歳）さん訪問

設立シンポジウムで講演していただいた酪農王国事務局の鈴木さんのお父さんです。

地域の気候、地形、水系を十分に理解し、活かした農業を行っておられます。年間を通して、水田稲作、畑での野菜作りを行っておられますが、農薬をほとんど使っておられません。今の問題は、とお聞きすると「いのししによる獣害」とのこと。でも、いのししのことを楽しそうに話されるので、いのししは普段何食べてるかたずねたら、いのししの山里の食生活の本ができそうなほど、自然の恵みと共生とは何かについて勉強になりました。

この日は、お借りしている田んぼで田植えを行いました。一昨年は、紙マルチの実験、昨年はレンゲ緑肥の実験を行い、今年は3年目の試みです。

その後、酪農王国を訪問しました。

5月20～21日

福島県大玉村役場訪問

安達太良山麓にある、兼業農家の多い大玉村。7月オープンの東洋一のキャンプ場計画に関して、村では、現在景観条例を作成中です。

地元住民であり福島県でコンサルを行っているアートパークの遠藤健二さんに案内をしていただきました。事務局では、地元学的な手法を使って、村民に、みんなの好きな風景を写真にとって、写真の裏に、場所となぜ好きなのかを書いてもらい、大きく拡大した地域マップに写真を貼って、村民の好きな風景＝村民の好きな大玉村の景観づくりから始めたらいかがですかという提案をしてきました。

文字だけの景観条例案は、簡単に作ることができますが、そこで、しっかり地域に根ざして生活している生活者の気持ちを反映した景観条例でなければ、本当の意味での景観（人々の生活の中での風景や景色）は良くならないのではないのでしょうか。

さらに、同村では姉妹都市提携先の検討も行いたいと考えているようです。この姉妹都市に関しても、まず、地域で生活する人々が、みずからの地域文化を見つめ、その上で、検討をしてほしいという願いをしてみました。

また、大玉村でお会いした86歳の小沼佐々右衛門さんは、海藻以外のものはすべて自給自足の生活をしておられました。山羊と鶏を飼い、数え切れない作物を育て、青春を語る元気な佐々右衛門さんにお会いして、自給自足とは作物とともに暮らす青春なのだと感じました。

5月21日 福島県只見町 たもかく訪問

只見木材加工協同組合。代表理事である吉津耕一さんは、以前からの本好きが高じて古本屋の経営も行っていきます。

全国から送られてきた古本数は何と100万。日本一の本屋さんを目指しています。この本屋さんのシステムは変わっていて、古本の買い取り価格1,670円分で1坪の森林と交換し所有者になれます。内訳は、670円が土地代、1,000円が森林維持費、地元の人の手で森が手入されるのが特徴です。

その他にも、森林だけでなく、りんごやシクラメンな

どとの交換もあります。また、民家の修復を、現在の生活様式に適應させながら行ない、ログハウスとは異なったセカンドハウスとして再生させています。

5月23日～24日 岩手県陸前高田市 グリーンツーリズムのモニターに参加

「人と自然に優しく、次世代に引き継いでいくものをつくるために」「自分たちの暮らしが真に豊かで楽しいものになるために」「自分たちが陸前高田を知り、その風土や歴史に育まれた暮らし、今の暮らしを知ってこれからの暮らしを自分たちの手で作っていくために」、地元の人たちによって作られた「景観とまちなみ研究会」。ここで手作りのグリーンツーリズムが始まろうとしています。

みんなで森の山菜取りに出かけ、たき火を囲みながらのキャンプを行い、語らう。次の日は、畑を耕し、野菜や蕎麦を植え、秋の収穫を楽しむ。地元の人たちの手による明るく積極的で楽しいグリーンツーリズムを経験することができました。

里地ネットワークとしては、この素敵な陸前高田がもっと元気になるように、たくさんの情報を届けたいなと思いました。

里地ネットワーク事務局 おすすめ図書情報

「私の地元学」吉本哲朗
(NECクリエイティブ)
「山のち川のち海のち温泉へ」吉本哲朗
(NECクリエイティブ)
「森のこころと文明」安田喜憲
(NHKブックス)
「環境考古学事始」安田喜憲
(NHKブックス)
セミナー講師をしていただいた吉本氏の推薦本です。

「エコミュージアム理念と活動～世界と日本の理念と活動～」
エコミュージアム研究会(牧野出版)。

事務局では、里地に関する全国からの資料を収集整理しております。
皆さまからの書籍、資料、ビデオ等のご紹介、ご寄付もお待ちしております。

ご案内と募集 (セミナー)

「パーマカルチャーと里地づくり」

日時：6月19日(金) 13:30～16:30

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：日本大学生物環境工学課 助教授 糸長浩司

パーマカルチャーとは、永続性を意味するパーマネントと、農業を意味するアグリカルチャー、文化を意味するカルチャーの合成語です。自然のシステムを生かした農の魅力暮らしの中に永続的に取り入れることで、環境と共生した暮らしの永続的な場を作り上げるデザインの考え方です。

都市でも農村でも、暮らしのベースに自然共生型の食糧と環境の創造の場をつくり出していくことで、世界的な広がりを見せています。近代的な暮らしのあり方が他立的であるのに対して、永続的で自立性の高い暮らしの場づくりを目指しています。

世界的な食料と環境問題を、住宅レベル、集住拠点のビレッジから解決し創造する世界的なムーブメントが「エコビレッジ」です。日本の集落や里山にはパーマカルチャー的視点が豊かに含まれています。それを再評価し、里山と集落の再構築の方向を探っていきます。

「グラウンドワークと里地づくり」

日時：6月20日(土) 10:00～13:00

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：東京農工大学 農学部地域生態システム学科

教授 千賀裕太郎

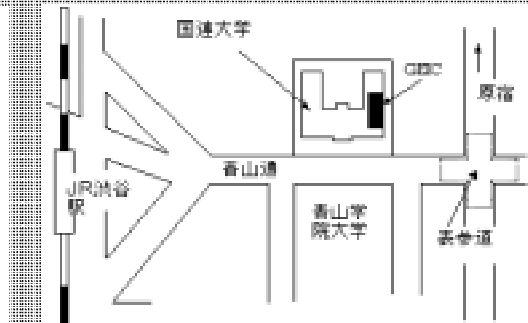
「地域住民が自分たちの環境を自分たちで手当する」ということをターゲットとしたグラウンドワーク。人間活動の現場での環境回復や環境創造の実践を、地域を構成するすべての主体、すなわち住民・企業・行政・学校等がパートナーシップを組んで基礎的環境ケアを行っていく運動の手法を学びます。

「本来、地域は様々な外的刺激に柔軟に対応しつつその独自の存在を維持する、人体のような一つの有機的総合体である。地域における住民、企業、行政のパートナーシップの形成は、人体における脳神経系のように、地域の自律的制御系を正常化することを意味する。地方分権の推進の中で地域の自己統治能力が必然的に問われることになるが、地域が自立の力量を総合的に備える上で、グラウンドワーク運動は決定的な意味を持つことになるんだろう。」(農村計画学会学術研究発表会要旨集・千賀祐太郎)

地球環境パートナーシッププラザ

東京都渋谷区神宮前5丁目53-70 国連大学ビル1階
地下鉄表参道駅下車3分

参加のお問い合わせ、お申込は
里地ネットワーク事務局(03-3500-3559)まで



セミナーこれからの予定

「地域はどうすれば活性化するか」

日時：9月18日（金）13:30～16:30
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：農林水産省農業研究センター
農学博士 長谷山俊郎

「外部参入者（インハビタント） と地域活性効果について」

日時：9月19日（土）10:00～13:00
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：財団法人 環境文化研究所 河原利和

「風・水・土とモンスーンアジアの 文化を見つめる」

日時：10月1日（木）13:30～16:30
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：ユーラシアクリエイティブジャパン代表
今井俊博

「日本の民族文化を伝承する」

日時：10月2日（金）10:00～13:00
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：民族文化映像研究所長 姫田忠義

「環境保全型の技術について」

日時：11月20日（金） 調整中
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：京都大学教授 内藤正明
日刊工業新聞 駒橋編集委員

「環境土木技術について」

日時：11月21日（土） 調整中
参加費：会員500円 一般1,000円
定員：30名
講師：西日本科学研究所 代表取締役 福留脩文

開催場所はいずれも環境パートナーシッププラザです。

お知らせ

ご希望の資料をお送りします。

里地セミナーやシンポジウム等の資料や記録をご希望の方は、以下のものを添えて事務局に申し出てください。できる限りの資料をまとめてご送付します。

資料請求に必要なもの

・角2封筒...お届け先住所、お名前を明記してください。切手を貼る必要はありません。

・メモ...希望する資料の内容（セミナー名、日時、講師名など）と連絡先（電話）、ご担当者名を記入してください。

・切手...手数料・郵送料として会員は1回500円、一般の方は1回1,000円を承ります。相当分の切手を同封ください。

来月号は7月20日頃に発行します

次回は、7月8月合併号として、7月20日頃発行予定です。あらかじめご了承ください。